

# 御挨拶

中村歌右衛門

皆様、本日はお暑い中をわざわざお越し下さいまして誠に有難うございます。

「葉月会」も今年は第三回を開くことになりました。これもひとえに皆様方の温かいご支援によりますものと深く感謝いたしております。

「葉月会」は、中堅、若手俳優の技芸の発表の場であるとともに、歌舞伎邦楽の若手の勉強発表もさかんになつてきました。まことに喜ばしいことと存じます。

昨夏から、お芝居の発表に力を入れましたところ、ご好評をいただきまして、出演者一同、たいへんに張りきつており、今年は、ふたたび古典の大物であります「朝顔日記」に挑戦いたすことになりました。加えて、邦楽の勉強も、ご覧のような演奏曲を勉強しました由、こういう発表会には珍しい、演奏・芝居・舞踊という企画をお楽しみ下さいますよう、私よりもお願ひ申し上げる次第でございます。

いづれにしましても、未熟者ぞろいでござりますので、お口まだるい点が多くあると存じますが、なにとぞ温かいご声援のほどをお願い申し上げます。なお、国立劇場の皆さんには公私にわたり多くのご協力をいただきましたことをこの機会に厚くお礼申し上げます。

(伝統歌舞伎保存会会長)

昭和五十九年八月

## 第三回 葉月会

歌舞伎青年俳優  
歌舞伎邦楽若手 研修発表会

○ 演奏 二人禿

竹本連中

長唄囃子連中

○ 生写朝顔話

山田案山子作

序幕 宇治川螢狩りの場

二幕目 島田宿奥座敷の場

大井川の場

○ 舞踊 俄獅子

長唄囃子連中

藤間勘十郎振付

○ 指導 第七期歌舞伎研修終了生	○ 指導 第七期歌舞伎研修終了生
○ 鳴長竹本連中	○ 鳴長竹本連中
○ 物連中	○ 物連中
○ 若生千穂	○ 若生千穂
○ 堤和彦	○ 堤和彦
○ 田村彦夫	○ 田村彦夫
○ 村岡和彦	○ 村岡和彦
○ 中尾伸助	○ 中尾伸助
○ 尾上松之助	○ 尾上松之助
○ 片岡幸之助	○ 片岡幸之助
○ 松澤幸三郎	○ 松澤幸三郎
○ 加賀屋江鶴	○ 加賀屋江鶴
○ 松本幸之助	○ 松本幸之助
○ 岸和田	○ 岸和田
○ 岩澤大蔵	○ 岩澤大蔵
○ 岩澤仲助	○ 岩澤仲助
○ 岩澤蝶十郎	○ 岩澤蝶十郎
○ 岩澤梅之助	○ 岩澤梅之助
○ 岩澤雀之助	○ 岩澤雀之助
○ 岩澤吉三郎	○ 岩澤吉三郎
○ 岩澤紅鯉	○ 岩澤紅鯉
○ 岩澤市川	○ 岩澤市川
○ 岩澤大河	○ 岩澤大河
○ 岩澤幸右衛門	○ 岩澤幸右衛門
○ 岩澤五郎治	○ 岩澤五郎治
○ 岩澤扇太夫	○ 岩澤扇太夫
○ 岩澤里長	○ 岩澤里長
○ 岩澤甲長	○ 岩澤甲长
○ 岩澤鳥羽屋	○ 岩澤鳥羽屋

八月十八日(土)

十二時三十分開演  
五時 開演

主催 (社団) 伝統歌舞伎保存会  
国立劇場

# 演 奏 一 人 禿

淨瑠璃

竹本 久磨太夫

竹本 重太夫

竹本 初太夫

竹本 異太夫

野澤松也

豊澤和雄

樹

三味線

野澤松也

合へ初春や合いづれ賑おう門松や 合禿々と澤山  
そうに云うておくれな訣見習うて やがて悪所の島  
原の ませよりそむる紅の花 外ではなぶられ内で  
はせかれ ほんに身も世もあられ降る 合雨の柳の  
出口まで 幾度通う小夜千鳥 鳴くかしがいの味氣  
なや 合へ文がやりたや 彼の君様へ 取りやちが  
えて余の人にやるな 花の彼の様の サア花のかの  
様の手に渡せ合へ朝のや六ツから／＼ 上衣下衣ひ  
つ重ね合禿は袖の振り始めつく／＼／＼には羽根を  
つく・イー・ウ・三・イ・四・ウ・五・重に 七重に 琴は十二十四  
十五手はまおく・十一のイー・ウ・三・イ・四・ウ・合・見よなら  
き久しき

# 演 奏 劍進帳

唱

芳村伊十祿

## 解説

「勧進帳」といえば、歌舞伎の人気狂言の中でも随一と言える程の有名な舞踊劇であらためて何も申しあげずとも皆様よくご存じのところです。今回は、「葉月会」の邦楽演奏シリーズの第二作品として、「勧進帳」をとりあげますが、昨夏の「京鹿子旅道成寺」にひきづきました。「素唄」というものの芸を鑑賞していただければ幸いです。ご存じのように、弁慶・義経・富権の三人が織りなす筋立てと、長唄の曲「勧進帳」の舞台融合が、この舞踊劇では格別に劇的で、名曲で、感動的です。開幕前の片車切（シャギリ）、やがて音もなく上がる幕、富権の名乗り、そして、旅の衣は篠懸の旅の衣は篠懸の義経の袖やおもるん……と謡いがかりで始まり、やがて寄せの合方から「これやこのの唄につれて花道から義経主従の出となります。ほんとうにわくわくする所です。前半は、このあと勧進帳の読みあけ、山伏問答、呼び止め、押合い、折かんなど豪快な趣に富み、後半は、しんみりとした主従の情味から庄重でしかも華やかな舞となり、やがて六方の引込みとなるまで息もつかせぬ面白さです。長唄「勧進帳」と芝居の「勧進帳」とを比較しながら鑑賞して頂くのも面白いとおもいます。後半の、延年の舞と呼ばれるところは囃子方のきかせどころで、滝流」という合方も舞台どちらがつて、演奏の場合はどうぞ本日は、若手が勉強しました大曲「勧進帳」をおたのしみ下さい。

（附 伝統歌舞伎保存会理事長）

「勧進帳」は、天保十一年、河原崎座の二月狂言に、元祖岡上郎白九十年の寿（ことぶき）として上演された。

市川海老蔵（七代目市川團十郎）の弁慶、八代目市川團十郎の義経

市川九蔵（後六代目團蔵）の富権左衛門、脚色者は三代目並木五瓶

作曲者は四代目杵屋六郎（後に六翁）、長唄は岡安嘉代八・杵屋

六郎と芳村伊十郎・杵屋長次郎とが向タテで勤めた。長唄の床に

両立をくつったのは此の時がはじめてである。

（譜ヒガカリ 次第）旅の衣は篠懸の 旅の衣は篠懸の 露け  
き袖やしをるらん 外記ガカリ 時しも頃は如月の 今き  
さらぎの十日の夜 ヘ月の都を立ち出でて 寄せノ合方  
へこれやこの 往くもかへるも別れては 知るも知

## 解題

松をかざして梅の折枝 それさこれさ それ好いた  
三味の手合へ梅は咲いたり咲かせたり 君が代の  
鶯宿梅とはやくそくも 合へ文より先に匂う梅合連  
理に遊ぶ まどの梅禿は小梅で室の梅すいな姿  
じやないかいな それそれ／＼それもそうかい  
な 心早や咲き面白や合豊たかに遊ぶ君が代 まが

き久しき

江戸の初春に、吉原の松飾りのある妓樓の見世先で、かわいい禿が羽根をつく姿を舞踊化した小品です。短い曲ですが、かわいらしい、ほほえましい曲風です。はじめに、長唄として作曲され、天明五年（一七八五年）正月の、江戸の桐座で初めて上演されました。竹本は、詞・曲とも似ており、人形芝居の変化物のひとつとしてとりあげられ、今日に残っております。

## 出演者の紹介

竹本久磨太夫（第五期生）

野澤松也（第三期生）

野澤賢治（第二期生）

豊澤和雄（第五期生）

井田浩樹（第六期生）

井田浩樹（第六期生）

波路はるかに行く舟の 海津の浦に着きにけり／＼  
ざとらんと旅衣 関のこなたに立ちかかる 合ノット  
へ夫山伏といつば 役の優婆塞の行義を受け 即身  
即佛の本体を ここにて打ちとめ給はんこと 明王  
の照覧はかりがたう 熊野権現の御罰當らんこと立  
どころに於て疑ひあるべからず 喪阿毘羅吽欠と  
珠数さらさらとおし採んだりへ元より勧進帳のあら  
ばこそ 窓の内より往来の 卷物一巻取出だし 勧進帳と名付けつつ 高らかにこそ読みあげけれ

らぬも逢坂の 山かくす 合霞ぞ春はゆかしける合  
波路はるかに行く舟の 海津の浦に着きにけり／＼  
ざとらんと旅衣 関のこなたに立ちかかる 合ノット  
へ夫山伏といつば 役の優婆塞の行義を受け 即身  
即佛の本体を ここにて打ちとめ給はんこと 明王  
の照覧はかりがたう 熊野権現の御罰當らんこと立  
どころに於て疑ひあるべからず 喪阿毘羅吽欠と  
珠数さらさらとおし採んだりへ元より勧進帳のあら  
ばこそ 窓の内より往来の 卷物一巻取出だし 勧進帳と名付けつつ 高らかにこそ読みあげけれ

（土卒がはこぶ廣台に 白綾袴一とかさね 加賀絹  
あまた取揃へ 御前へこそは直しけれ へこは嬉し  
やと仙伏も しづしづ立つて歩まれけり へすはや我  
卒を引連れ関守は 門の内へぞ入りにける合へつひ  
に泣かぬ弁慶も 一期の涙ぞ殊勝なる 二中カカリ  
へ判官御手を取りたまひ合へ鏡にそひし袖枕 かた  
敷く隙も波の上合或時は舟に浮かび 風波に身をま  
かせ 又或時は山背の 馬蹄も見えぬ雪の中に海  
少しあり夕浪の 立ち来る音や須磨明石合とかく三  
とせの程もなく 痛はしやと萎れかかりし鬼あ  
ざみ 霜に露置く斗りなり 一中カカリ へ互ひに袖を  
引き連れて いざさせたまへの折柄に 説教ブシ  
へ実に／＼是も心得たり 人の情の益を 受けて心  
をとどむとかやへ今は昔の語り草へあら恥づかしの  
我心 一度見えし女さへ へ迷ひの道の闇越えて 今  
又ここに越えかねる 半太夫 カカリ へ人日の闇のやる  
せなやへああ悟られぬこそ浮世なれ 本調子 へ面白  
や山水に おもしろや山水に 盆を浮べては 流に  
引かるる曲水の 手先づきへぎる袖ふれて いざや  
舞を舞はうよ 合舞 へ元より弁慶は 三塔の遊僧  
舞延年の時の和歌 合舞 へ是なる山水の 落ちて嚴  
又響くこそ 鳴るは滝の水 鳴るは滝の水 合舞  
へ鳴るは滝の水 日は照るとも 絶えずとうたり  
疾く／＼立てや手束弓の 心ゆるすな関守りの人々  
いとま中してさらばよと 窓をおつとり肩に打ち  
かけ 合へ虎の尾を履み毒蛇の口を 遁れたるこち  
ちして 陸奥の国へぞ下りける

# 生写朝顔話

二幕三場

宇治川螢狩の場

島田宿奥座敷の場  
大井川の場

序幕

宮城阿曾次郎  
長岡丹六  
滝村重右衛門  
腰元  
秋月妻楨の戸  
同娘深雪

淨瑠璃

竹本葵太夫  
竹本谷太夫

三味線

豊澤瑩緑  
野澤松也

下女  
若女  
中女  
おと下女  
おな下女  
く下女  
べ下女

蝶橋三郎助  
島田和彦郎助  
江雀助

鯉大後藤明  
江藏紅夫

幕目

## みどころ

この芝居の主題は、美男美女の恋の放浪物語であり、今日のそれちがい劇の原形ともいえる芝居である。

見染めの「宇治川螢狩」を序幕とし、二



朝顔実ハ 深雪 加賀屋歌江

幕目に「宿屋」「大井川」を上演したのは、昭和36年5月・歌舞伎座で歌舞右衛門の朝顔、海老蔵(先代)の阿曾次郎という組合わせが、もう二十三年も前のことにないことを説いています。今回、師匠歌舞右衛門のゆるしをえて加賀屋歌江が、「宇治川」を上演する。というのは、本人は、朝顔は三度目で、正確には昭和39年4月30日東横ホール、昭和54年8月国立小劇場と二度演じているが、大劇場の舞台美術の協力をえて、「宇治川」を演ずるのは勿論はじめてである。見染めは、芝居の華であり、象徴である。この場面があつて、はじめて「宿屋」の二人の再会が、観客の胸をうつ。

深雪と、朝顔と、猛暑の中、稽古にはげんだ、歌江の「朝顔日記」を肥えた皆さまの目でじっくりとみて頂きたいと思います。

## あらすじ

若き儒者宮城阿曾次郎は、「宿屋」「大井川」を上演したのは、昭和36年5月・歌舞伎座で歌舞右衛門の朝顔、海老蔵(先代)の阿曾次郎といふ組合わせが、もう二十三年も前のことにないことを説いています。今回、師匠歌舞右衛門のゆるしをえて加賀屋歌江が、「宇治川」を上演する。というのは、本人は、朝顔は三度目で、正確には昭和39年4月30日東横ホール、昭和54年8月国立小劇場と二度演じているが、大劇場の舞台美術の協力をえて、「宇治川」を演ずるのは勿論はじめてである。見染めは、芝居の華であり、象徴である。この場面があつて、はじめて「宿屋」の二人の再会が、観客の胸をうつ。

深雪と、朝顔と、猛暑の中、稽古にはげんだ、歌江の「朝顔日記」を肥えた皆さまの目でじっくりとみて頂きたいと思います。

う宿屋に泊った。と、ふと部屋の一隅にある衝立(ついたて)を見ると、張り交ぜの中に、かつて宇治の螢狩りの時、秋月の娘深雪に書いて与えた扇面があるので驚いた。駒沢は宿の亭主徳右衛門にこの扇子のことをきくと、それには哀れな話があるといって語り始めた。この扇子の元の持主は、近辺を歌つて歩く盲目の娘、もとは中国邊のお歴々の娘だ。そうだが、尋ねる人があるとて親許を家出して諸国を流浪する中、目を泣きつぶしてしまった。ここらをさまよつている。この娘、美女で声もよく、人々に同情され、朝顔とよんでいるといふのである。駒沢はその朝顔こそ深雪であり、自分を尋ねさせているのだと察して胸打たれた。彼はその女をよんでもくれるようになつて亭主に頼んだ。そこへ岩代多喜太という相役の侍がきて、朝顔をよんだときと、一緒にきこうと云いだした。意地の悪いやな奴なので、駒沢は困つたが断るわけにもいかない。やがて、朝顔がきた。見れば果して深雪だったが、岩代の手前名のこともできない。朝顔は例の「露の千ぬ間」を琴を弾きつつ唄い、すんでから身の上話をした。きけば、きくはど哀れだったが、どうにもならず、朝顔は帰つていた。岩代が去つたあ

## 「朝顔日記」のこと

この芝居が、はじめて世にでたのは、大阪の堀江座で、司馬芝斐の書いた小説「あさがお」を脚色したものとされています。文化九年(一八二一年)出来島千助の脚色です。しかし、全く評判にならなかつたと書かれています。ところが、同じ材料を近松徳三が脚色して、演ぎないでいたところ、文化十年に江戸から二代目沢村田之助が上ってきて作者奈河晴助の手をへて芝居にかけました。三曲達者な田之助は、大いに評判をとり、當時の大坂では、着物の帯はもちろん、揚技入れから下駄まで朝顔の模様をつけて売れたといわれています。当つた

この芝居が、はじめて世にでたのは、大阪の堀江座で、司馬芝斐の書いた小説「あさがお」を脚色したものとされています。文化九年(一八二一年)出来島千助の脚色です。しかし、全く評判にならなかつたと書かれています。ところが、同じ材料を近松徳三が脚色して、演ぎないでいたところ、文化十年に江戸から二代目沢村田之助が上ってきて作者奈河晴助の手をへて芝居にかけました。三曲達者な田之助は、大いに評判をとり、當時の大坂では、着物の帯はもちろん、揚技入れから下駄まで朝顔の模様をつけて売れたといわれています。当つた

のは、田之助だけではなく、駒沢をやつた二代目嵐吉三郎も評判をとるために、倚麗さっぱりとした。駒沢は是非なく、自分も持っている同じ扇面と秘法の目薬を渡してくれるよう頼んでいたが、女に惚れられても、ともども宿を出でていった。朝顔は虫のしらせか用事にゆくのをやめて宿へ引返してきた。そして主人から扇と薬を渡され、文句を読んで貰うとびっくり仰天、さてこそ悲しいかの人と、後を追つて、折柄ぶり出した雨の中を、狂氣のようだ。大井川へ……大井川は篠つく雨に川水溢れ、川止めとなつた。深雪はここ迄きて、恋人は既に渡つてしまい、川止めとなつた。その後を追えぬは何なる不運かと身をもがいて嘆き悲しんだ。我に返つた彼女は身の不運に生きる気も失せ、川へ身を投げて死のうとした。ところが、彼女の行方をさがしていた奴の関助と戎屋の主人徳右衛門とが後を追つてきて抱きとめた。きけば、この戎屋こそ、彼女の乳母浅香の父と分れて、切腹してその生血で駒沢の残した薬をのむと、深雪の目は忽ち開いた。

そして彼女は駒沢と再会の希望をとり戻して、徳右衛門の忠義にあつく感謝するのだった。岩代が去つたあ

(な)

## 舞踊俄獅子

藤間勘十郎 振付

長唄囃子連中

解題  
四世杵屋六三郎作品。

初演は天保五年(一八三四年)十月で、全編が「相生獅子」をもとにしている。毎年九月、吉原の恒例になつて仁和賀の気分を長唄化し、鼓鳴・木遣り・投節くづし・笛入りの唄・獅子の狂いの合方・囃子の鳴物等、頽廢期の廓情緒や、俄の雰囲気を実によく出し

た名曲です。

## 昨夏の舞台から 第二回 葉月会

想い出

葉月会

58. 8. 18

年に一回、八月に研修発表をする「葉月会」にとつて、昨夏の第二回は忘れる事のできない熱気と拍手の舞台でした。ご覧になられた皆様には、想い出のしおりに、もしご覧にならなかつた方々は、ご想像のよすがに、この舞台記録写真をお届けします。歌舞伎は、歌あり、舞踊あり、演技あり、長い伝統のうえに築かれた、たぐい稀な演劇財産で、葉月会は少しづつ、少しづつ稽古してゆく積りです。昨夏は、芝居として「傾城阿波の鳴門・どんどろ大師の場」、舞踊として「供奴」「釣女」を習い、邦楽として「団子壳」を義太夫、「京鹿子娘道成寺」を長唄囃子の若手が素の演奏として発表しました。これは、非常にユニークな企画として、ご好評をいただいた理由です。「葉月会」を今後一層ご支援の程お願い申上ます。

「どんどろ大師」 妙林左升 妙珍延寿  
「供奴」 奴みの虫



「釣女」 大太郎冠者 幸名雀之助  
幸右衛門 雀姫御寮 魏江助京歌

「どんどろ大師」 お弓歌江 おつる宗丸

(撮影 石井雅子)

○……もう19年も前、昭和40年3月に、社団法人 伝統歌舞伎保存会が誕生した。

正式には 3月1日 会長には 市川寿海 副会長には 市川左團次(三代目) 以下 団十郎 中車 羽左衛門 梅幸 仁左衛門 歌右衛門 勘三郎 又五郎 三津五郎 幸四郎(八代目) 各優が理事、松緑 芝鶴 勘弥各優が、監事に就任した。会員は 丁度九十名 現役俳優三〇名の中から 計90人が会員となった。あの日から約二十年に及ぶ今日、故人となられた優は 会長の寿海(昭46・4・3)をはじめ、左團次(昭44・10・3) 团十郎(昭40・11・10) 中車(昭46・6・20) 三津五郎(昭50・1・16) 白鸚(昭57・1・11) 芝鶴(昭56・9・3) 勘弥(昭50・3・28) の8人、実に十五人の役員の中、半分以上の方々が故人となられた。近く20年の歴史を迎えるにあたり、活躍されて鬼籍に入られた保存会の先人に、あらためて追悼の意を捧げるものである。

○……発足して間もなく、昭和40年3月26日に、重要無形文化財・総合指定「歌舞伎」の指定をうけた。

当時の会長 市川寿海は

記者に対し、「むかしは古老たちがきびしくしつけまし

た。舞台にいても、さじき

にきこえるくらい小言をいったものですが、それがいい

意味のはげましになつたものです。わたしは、これが美しい「封建」だというのですが……と俳優養成のむづかしさを語った。その年の秋、国立劇場開場、昭和40年代の幕あけは、歌舞伎にとって新たな元年ともいえる画期的であった。当時の資料をみても、保存会の仕事は、国立劇場での古典歌舞伎の上演と、俳優養成の二本柱をしっかりと建てるにあつたのがよく判る。しかし、反面ジャーナリストの声も高く、中でもいまは故人の安藤鶴夫氏の一言は、印象的なものがあった。「歌舞伎は、能楽や人形浄瑠璃とは違つて、こんにち立派に興行として成立つ芸能であるだけに、この歌舞伎保存会の発足はいろいろの意味で興味がある。一日に一万歩歩くといふ萬歩会ができるわざもその会員になつたが、会員になつただけで一日万歩を実行しないことには意味がないことを発見して腹を抱えて笑つた」とある。歌舞伎は生きており、保存会は当時から、興隆へのエネルギーを始動していた。

○…… 国立劇場の開場、つまり昭和40年11月・12月の

### 伝統歌舞伎保存会 || 小史 ||

公演以来、二本柱のうちの一本柱は建ちあがつた。  
もう一本の柱、俳優養成を実現したのが、昭和45年の春、花の第一期研修生が入所した。以来、第一期研修終了生を世に送りだした昭和47年より今日まで十四年間の歴史は、歌舞伎俳優はいかにして生まれるかの生きた材料そのものである。今春、終了生の第七期までに、延べ四十名に及ぶ役者が、現実に樂屋で働いており、今年は二人の名題俳優がお披露目をした。初代の寿海会長もし今日の隆盛をみたらなんと感慨をのべるだろうか。美しい「封建」は、生きていたのではないかろうか。

○…… 寿海会長のあと、中村歌右衛門が会長就任 副会長に尾上梅幸が就任した。昭和47年度発足の現体制である。昭和51年6月 つまり52年度に、歌舞伎邦楽が指定を受け、竹本・長唄・鳴物の計39人(現)が入会した。舞台の総合性から狂言作者も2人(現)入会した。発足当初90人で構成された保存会も、現在は俳優136人・長唄12人・三味線11人・鳴物20人・竹本15人・狂言作者4人の合計198人の構成をみるに至つた。年一回の保存会の自主公演「葉月会」の演目には竹本・長唄囃子の演奏が必ずとりあげられ、会員の練磨は申すに及ばず、入会を目指す次代の若手たちが暑中である。同時に、昭和50年より竹本養成の画期的な研修制度が始まり、つづいて昭和56年には、鳴物の研修制度が発足して第二期生が目下研修中である。

○…… 理事に歌舞伎邦楽の中からも選出されて、現在の体制は左記の通りである。

の研修の成果をご覧いただくのも、こうした会の特色ゆえである。同時に、昭和50年より竹本養成の画期的な研修制度が始まり、つづいて昭和56年には、鳴物の研修制度が発足して第二期生が目下研修中である。

が必ずとりあげられ、会員の練磨は申すに及ばず、入会を目指す次代の若手たちが暑中である。同時に、昭和50年より竹本養成の画期的な研修制度が始まり、つづいて昭和56年には、鳴物の研修制度が発足して第二期生が目下研修中である。

が必ずとりあげられ、会員の練磨は申すに及ばず、入会を目指す次代の若手たちが暑中である。同時に、昭和50年より竹本養成の画期的な研修制度が始まり、つづいて昭和56年には、鳴物の研修制度が発足して第二期生が目下研修中である。

# 出演者紹介

市川鯉紅

市川海老蔵門弟。

中村歌右衛門門弟。  
昭和39年4月30日東横ホールでの「小薔薇会(こつぼみかい)」で朝顔を初演。当時の劇評家で今は故人の秋山安三郎さんから激賞をうけたのは今日ではもう知る人ぞ知る年月が経った。昭和54年8月、国立小劇場での歌舞伎全で再演、当たり役となつた。

今回は、念願の「宇治川螢狩り」で深雪は初役、大劇場での朝顔が期待される。

【昭和26年10月、中村歌次で大阪歌舞伎座「角力場」の見物人で初舞台。昭和32年6月、二代目加賀屋歌江を「鏡山」の左枝、「今宮心中」の若女房で襲名。】

## 松本幸右衛門

初代松本白鸞門弟。  
昨夏「釣女」で太郎冠者を演じ、たしかな舞台をみせた。

それもその筈、芸歴の持主で、往年のかたばみ座で腕はみがいてある。歌江・幸右衛門のコンビは、舞台の近似質もあるが、ともに人柄がすこぶるよい。いわゆる相性がいいのである。この二人からひき出すものは、まだまだ奥が深い。

【昭和11年9月、中村福次で神奈川県座間町三浜館「先代萩」の鶴千代で初舞台。昭和21年4月、三井京次郎と改名。初舞台以後、かたばみ座を経て、昭和30年1月、市川中車の門に入る。昭和30年1月、三代目市川中之助と改名。昭和37年7月「笠つるべ」の太鼓持半七で名題昇進。】

## 松本幸雀

初代松本白鸞門弟。  
葉月会にはおなじみの人で、昨夏は「釣女」の大名を演じて、ふくらみのある優雅な立役をこなした。

今日は、本来の女方で母横の戸、「俄御子」の芸者で地力を發揮する。  
【昭和24年1月、松本高弥で東劇「大感激」の仕丁で初舞台。昭和23年9月、歌舞伎座「亡者妻」の娘で松本幸雀と改名。昭和53年2月「歌舞伎座で音女から尾上梅之助に改名。】

【昭和53年6月、松二郎から岩代役は、どちらかといえば、引出しにない役柄だけに、みものである。】

【昭和40年8月、中村歌次で初舞台。昭和53年6月、松二郎から岩代役は、どちらかといえば、引出しにない役柄だけに、みものである。】

【昭和40年5月、朝日座で初舞台。昭和53年6月、松二郎から岩代役は、どちらかといえば、引出しにない役柄だけに、みものである。】

片岡孝夫門弟。  
孝夫さんの秘蔵弟子で、話しかけていると関内のやわらかみがじみてくる貴重な存在。葉月会は初参加、出演の岩代役は、どちらかといえば、引出しにない役柄だけに、みものである。】

【昭和40年5月、朝日座で初舞台。昭和53年6月、松二郎から岩代役は、どちらかといえば、引出しにない役柄だけに、みものである。】

片岡孝夫門弟。

中村富太郎門弟。

発行 昭和59年8月18日

102 千代田区集町4-1 国立劇場

社団法人 伝統歌舞伎保存会

事務局 成島和男

葉月会

(265) 7411番